茨城県立図書館ボランティア
通信紙 No.27 (2015.8.1 刊行)
広報委員会編集、県立図書館発行

かがやき

特別企画

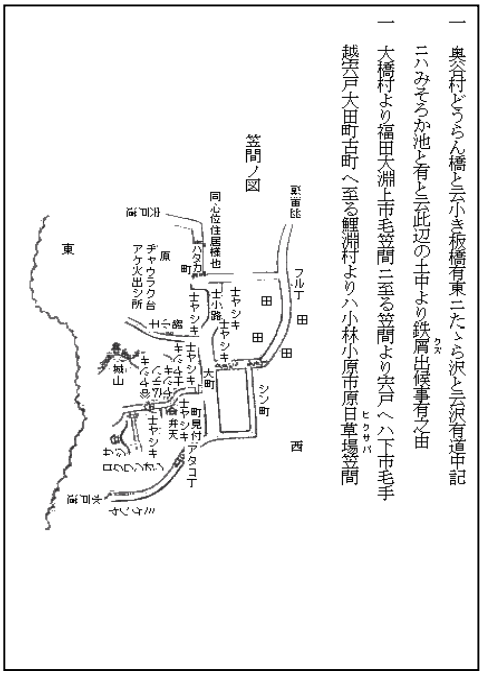
1. 古文書への取り組みの面白さ

郷土資料整理委員会
唐沢矩子、辻雅子、中山真一

「古文書解読のノウハウと面白さ」というのが編集者から期待されたタイトルであった。古文書の面白さと言えば、大抵の人は、外国語を訳しおおせた快感と同じく、一癖も二癖もある古人の達筆を現代語に訳し「解読」したことを喜びと思っておられることだろう。わが郷土資料整理ボランティアグループは、しかしながら、古文書の解読以外にも面白さを知っている。それは、読み物としての面白さと、誰もが気軽に手に取ることが出来るような作品に仕上げる面白さだ。このことを書きたくて勝手にタイトルを変えてしまった。

われわれが取り組む古文書の多くは茨城と言う地方がその時代に起こった事柄や事物を活写した実に生き生きとしたものばかりである。読み物として一級と思う。今、製本化（冊子化）に向けた作業を進めている「明君一斑抄」という書物がある。水戸藩主・徳川斉昭が当時の将軍・家慶に向けた「将軍かくあるべし」という諫言の書であった。しかし、斉昭は、直言居士ゆえに当時幕府内で徹底的に敬遠され、将軍家慶から蟄居を命じられていた身である。諫言を受け取った天才老中・阿部伊勢守正弘も処置に困ったであろう。結局将軍への奉呈はかなわなかった。みんな仲良しで、日本の近代化が進められたわけではない。歴史の舞台上にある人間同士の緊張が伝わってくる。解読は、文字ばかりを追っている作業にとどまらず、描かれている場面の想像を逞しくしてくれる。

今後、機会があれば、こんな面白さをお伝えすることができると思うが、そこまでには、もちろん古文書を解読しなければならない。そこのところはこのグループのメンバーの多くが個々人の趣味として会得した技巧を発揮するところである。まず図書館の貴重図書の書庫から本を選び、傷めないよう１ページずつ写真撮影してコピー原本を作る。コピー原本を分担してメンバー各自が持ち帰り解読を開始、２ ヵ月に１度集まって進捗状況の確認や、判読困難な箇所や疑問点などについて話し合い解読を進める。次ページの上の図のような原文が下の図のように化けるのはこの過程である。解読ミスを最小限に抑えるために、メンバー間で何度も確認を重ね、最終稿完成まで、数か月。ようやく冊子化や図書館のホームページに掲載する作業が始まる。解読すれば、終わりかと思いきや、このグループはそれでは許さず、最後の冊子化やホームページ化の作業でまた苦しむ。生みの苦しみだ。しかし、そうやってでき上がった作品を「素敵な作品ですね」と言ってくれた方がいた。



2. 図書館ボランティア論

元原研職員
山本俊弘

図書館利用者の多くの方は、図書館の運営について、さまざまな要望や不満などを抱いていることであろう。これらに応えるには、ちょっとした創意工夫で解決できるものもあれば、予算措置が必要なため、容易に実現できないものもある。

もちろん、自治体から図書館に割り当てられている限られた財源で利用者の要望に応えていくには、最大限の知恵を絞って、多種多様な方法を考えていく必要があろう。

これは、図書館を運営する行政側に任せるだけでなく、受益者である利用者自らも当事者として協力していくべきである。J.F.ケネディの言葉を借りるなら「自分が図書館に何ができるかを考えよ」ということになろうか。しかし、我々の意識は、行政が何かしてくれるのが当然であって、そして、不満があれば、その不作為を責める論調が多い。福祉亡国論的に言えば、保育所の待機児童問題など、その典型である。

昔々、週刊誌に載っていたカナダ人のエッセーでは、「日本の図書館は、休館日が多すぎる」とのこと。私が、現在、住んでいる地元の公立図書館の年間の休館日数は、約100日である。そのカナダ人曰く、「図書館を年間100日以上も休館させている市長は間違いなく首になるだろう」とのことである。カナダやアメリカの図書館にはない蔵書点検による閉館が、日本の図書館には、年間26日ほど設けられている。私自身、図書館に行ったものの、運悪く、月末の整理日で利用できなくて、無念な思いをしたことがある。

予算を増やさずに閉館日を減らすなどの利用者の利便性を高める方法はないものか。

不満を抱いて、それを行政に訴えるだけでは、問題は、解決しない。そこで期待されるのは、図書館員を補助するボランティアの積極的な活用である。アメリカの図書館ではボランティアに負っているところが多いと聞く。図書館を利用し、高い関心を抱いているひとは、是非とも、自らその運営を支援する側に立つことを考えてください。

3. こんな図書館がいいー勝手な夢想

元東京大学
島薗　進

東大安田講堂(2012.6.15)

仕事柄、蔵書が多いが、問題は、どこにどの本があるか分からなくなることだ。30 歳台の後半から長く住んで居た家では、狭い庭に、プレハブを並べるなどして、本を詰め込んでいたが、どこに、どういう本があるか、だいたい分かっていた。

親が亡くなり転居した新しい家には書庫を作ったが、もう 4 年経つというのに、どこにどの本があるか分からないことが多い。自分で置いたのだが、根気がなくて、きちんと整理していない。どういうふうに並べるかの方針が定まっていない。また、書庫があっても狭いので、身動きするのもたいへん。見つけるのを諦めてしまうことも多い。別のところで借りたり、アマゾンの中古で安いものをもう一冊、買ってしまったりする。

新緑期の三四郎池 3(2012.6.15)(周囲の散歩道)

新緑期の三四郎池 1(2012.6.15)

こういうだらしない私にとって、今、見たい本がどこにあるか、それがすぐに分かる図書館は、すばらしい。並んでいる本を見比べながら、選べるのがよい。前の家では公営図書館が近かったので、そこで、そんな時間が持てた。さらに、そこに、書物を読める椅子とデスクがあれば、もっとよい。できれば、夜も含めて、長い時間、開館しているとよい。本を読みたくなる時間は人が外で活動しない時間が多いのだから。

これは本好き人間のわがままな夢想である。しかし、そのうち人口が減ってくると、

今、どんどん建てている大きなビルに余ったスペースが増えてくるのではないか。そこを利用して、ゆったりした図書館を作ってほしいものだ。本ばかり詰め込むと重みがたいへんなので、ゆっくり読めるスペースを併設する。コーヒーやお茶を飲んだり、話し合ったりするスペースも作る。高齢者の奉仕者がスペースと本の管理に協力する。

新緑期の三四郎池 4(2012.6.15)

新緑期の三四郎池 5(2012.6.15)

最近は大型書店（ツタヤ、ジュンク堂など）で、そんな感じに近いものがふえてきた。若者には楽しいらしい。お財布、だいじょうぶか。だが、図書館は、あまり出費がないのだから、ずっといい。

最後に大事なこと―新しいものがいいとは限らない。図書館は、時代を超えて他者と語り合える場所だ。

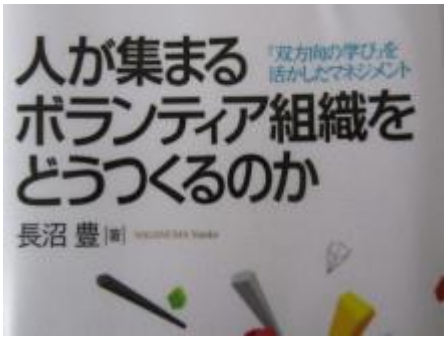
新刊本紹介

広報委員会
桜井　淳

過去 2 年間、新刊本を中心に、3.11 以降の人文社会科学にかかわる書籍を借り、熟読している。

茨城県立図書館の文献検索システムに、キーワード「図書館」や「ボランティア」と記入すると、それぞれ、約 500 件もの文献が示される。両者に対し、最近の啓蒙書や学術書を数冊ほど熟読してみた。

この新刊本は、私のようなボランティア初心者だけでなく、数年以上も携わっている経験者に対しても、改めて、ボランティアとは何か、ボランティアへの良いかかわり方、良いボランティアの組織化と対人関係など、試行錯誤の体験に基づく、到達点について、記したものである。読んでみて反省すべきことが少なくなかった。



ミネルヴァ書房(2014)

編集後記

ボランティアを長く務めているひとに、その目的を聞いてみると、誰しも、「笑顔が見たいから」「笑顔に癒される」「笑顔が生きる源になる」と答えます。しかし、本当にそうだろうか？

ボランティア制度が社会に深く浸透している欧米と異なり、日本のボランティアの年齢構成を調べてみると、40-50 歳台の主婦と定年退職後の男性が、圧倒的に多い。前者は、子育てが終わり、あるいは子供が独立し、多忙な日々から解放され、多少でも、自身の時間が持てる年齢に達したこと、後者は、さまざまな制約の中での会社人間から解放されたことにより、改めて、人生を考え直し、自身がたどった道やこれからのことを考えての意思表示と解釈できます。

仏教の教えのひとつには、良い行いとして、人生において、常に、留意すべきこととして、「六波羅蜜」(人間が徳を積むための必須事項)があります(「般若心経」ではそのことを強調)。その内容は、小学生でも知っているような簡単なことですが、誰ひとり、守れなかったことです。

「六波羅蜜」の中のひとつに「布施」というのがあります。「布施」とは、檀家が寺にする現金寄付行為だけではなく、物品や労働や精神の支援なども、含まれます。ボランティアという労働行為は、自身の徳を積むための「布施」なのです。

ですから、相手(たとえば、茨城県立図書館職員や利用者や児童など)からどう思われたいかということよりも、むしろ、自身がどのような質の人間に完成したいかという自己研磨の行為なのです(過去の好ましくない行いの反省と克服などを含む心を磨くためのざんげ行為)。

ですから、ボランティアというのは自身のための心の修行なのです。

第一に、本当に、見たいものは、自身の心の納得度なのです。他のことは二の次の事。

「かがやき」No.26 には上條哲「ボランティア 68 年」が掲載されています。大変、中身の濃いエッセーです。上條さんには、連載として、「ボランティア 68 年の詳細論」をお願いしました。

私が、上條さんの説明が信頼に値すると受け入れた根拠は、ある事項に対する聞き取り調査の際、「NHK 水戸支局近くにある小さな教会の牧師が忙しい時には、牧師に代わって、「聖書」の解説や説教をしていました」という言葉に対し、「宗教学」や「聖書」についてのいくつかの専門的な質問を投げかけたことに、すべて、的確に回答できたことでした(私は、東大大学院人文社会系研究科で、宗教学・比較宗教学・宗教社会学・聖書解釈学・中世ユダヤ思想の研究をしており、また、曹洞宗修行僧でもあり、質問事項は、専門的で、難解)。

仏教の「法話」やキリスト教の「説教」は、表面的には、つまらないことを話しているように感じられますが、実際には、そうではなく、誰にでも、できることではなく、「表を見せ、裏を見せ、散るもみじかな」のごとく、すべてをさらし、俗を超越し、聖を知り尽くした人間にしかできないことです。本物のボランティアを極めた人間は極めて謙虚です。68 年の先に何が見えるのか、ぜひ、おうかがいしたい心境です。

桜井　淳